vol.6

2008. 6. 10

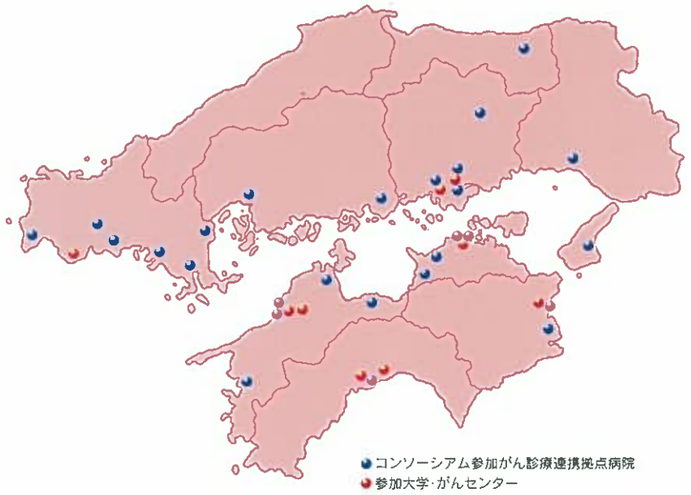
MONTHLY REPORT

マンスリーレポート

Gann Pro

Mid-West Japan
Cancer Professional Education Consortium

中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム



愛媛大学
愛媛大学大学院医学系研究科
学務室大学院チーム
TEL(089)960-5868

岡山大学
岡山大学大学院医歯薬学総合研究科等
学務課大学院係
TEL(086)235-7986

香川大学
香川大学医学部学務室
(入試担当)
TEL(087)891-2074

川崎医科大学
川崎医科大学学務課
教務係
TEL(086)464-1012

高知女子大学
高知女子大学学生課
大学院担当
TEL(088)873-2157

高知大学
高知大学医学部学生・研究支援課
大学院教育担当
TEL(088)880-2263

徳島大学
徳島大学医学・歯学・薬学部等
事務部学務課大学院係
TEL(088)633-9649

山口大学
山口大学医学部学務課
大学院教務係
TEL(0836)22-2058

四国がんセンター
TEL(089)999-1111

http://www.chushiganpro.jp/

vol.6

2008. 6. 10

MONTHLY REPORT

マンスリーレポート

Gann Pro

Mid-West Japan
Cancer Professional Education Consortium

中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム

趣旨・組織

がんは、わが国の死亡率第１位の疾患ですが、がんを横断的・集学的に診療できる専門家が全国的に少なく、その養成が急務とされています。また、近年の高度化したがん医療の推進は、がん医療に習熟した医師、薬剤師、看護師、その他の医療技術者等（コメディカル）の各種専門家が参画し、チームとして機能することが何より重要です。そのため、がん医療の担い手となる高度な知識・技術を持つがん専門医師及びがん医療に携わるコメディカルなど、がんに特化した医療人の養成を行うため、大学病院等との有機的かつ円滑な連携のもとに行われる大学院のプログラムが「がんプロフェッショナル養成プラン」です。

ごあいさつ

当コンソーシアム事務局では、講演会、海外研修、学生募集などの連絡を目的としたマンスリーレポートを発行しています。

本プランは、中国・四国８つの大学が一つのコンソーシアムを作り、各大学院にメディカル、コメディカルを含む多職種のがん専門職養成のためのコースワークを整備し、これに地域の28のがん診療連携拠点病院が連携することにより、広い地域にムラなくがん専門職を送り出すプログラムです。がんに関わる多職種専門職が有機的に連携し、チームとしてがん診療ならびに研究にあたることができるよう職種間の共通コアカリキュラムの履修を出発点として教育研修を行います。また、国内外のがんセンターと連携し指導的ながん専門医療人養成のファカルティ・ディベロップメントを連動させ、がん専門職養成の教育能力を強化します。こうして専門的臨床能力、チーム医療や臨床研究の能力をともに身につけたがん専門職が数多く輩出されることにより、地域におけるがん治療の均てん化、標準化が期待されるとともに、臨床研究の活性化が期待されます。

本誌をきっかけに、大学院入学や各種セミナーへの参加等をご検討いただければ幸甚です。

中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム
事務局

腫瘍外科専門医コース新入生、がんプロへの思いを語る

山口大学

前田 和成 さん

がん医療の担い手として、これまで知識・技術の習得の場は、基本的に大学およびその関連病院と学会・教育セミナーでした。本年度より始められたこのプロジェクトは、高いレベルでの医療の均てん化を目指し、8大学がネットワークを組んだコンソーシアムであり、eラーニングシステムを用いて他大学、他診療科におけるがん診療に関する講義を勉強できます。消化器外科を専門にしております私にとりましては、とても魅力的である反面、緊張もあります。しかし、近年重複がんの報告も増加し、また転移がんに対する集学的医療の重要性が高まっており、各領域でのがん医療はお互い密接な関係を築き、多職種と連携してチーム医療をおこなっていく必要があるように思われます。何よりも、がんに侵された病める方々のために、「がんのプロフェッショナル」の名に恥じぬよう、努力したいと思います。

筒井 理仁 さん

平成20年4月から大学院に入学し、がんプロコースに進むこととなりました。
第一期生ということで、がんプロの方向性は模索中の感もありますが、このコースに期待することをあげてみたいと思います。

まず、抗がん剤治療に関しての系統的かつ実践的な知識を身につけるということ。臨床に沿った系統的な知識を身につけるまとまった講義は学生のときはもちろん、卒後もなかなか受ける機会がないため、知識の整理を行うよい機会になると考えています。

次に、自分の領域のみならず、他科の治療法も学ぶことで、より応用のきく知識とすることができるのではないかということ。

そして、横断的なチーム医療を目指すということで、自分とは違った専門職の役割を理解し、それぞれの得意分野を生かす治療が可能となるのではないかということ。

また、日本のみならず、より専門家の集まった海外でのがん治療チームの実際も知ることができるというのも、このコースに期待する所です。

修了時には、ちょっと困ったときに相談してみようといわれる存在になれることを目指し、知識／経験を身につけていきたいです。

Johns Hopkins Singaporeにおける「がん薬物療法研修」

山口大学大学院医学系研究科　消化器・腫瘍外科学
吉野茂文（講師）、鈴木伸明（助教）

研修期間：2008年3/17(月)～3/28(金)
研 修 先：Johns Hopkins Singapore(JHS) International Medical Centre
研修目的：JHSにおいてoncologistによる専門的な抗癌剤治療を視察し研修することで自身がfacultyとして発展し、さらに将来的に新たな若手のoncologistを育成していくことを目的とする。
研修内容：Prof.Changをはじめ5名のmedical oncologistのもとで外来診療、病棟回診を視察。medical oncologistのレクチャー聴講。Tumor Board Meetingへの参加など。

日々の研修内容について簡単に紹介する。

3月17日（月）

コーディネーター(Erin Pung)、オペレーター（Sinan Sanvar)、病棟看護師長（Elizabeth I. Morse)、外来看護師長（Leong Chin Jong)と研修内容につき打ち合わせを行う。岡山大学から参加されたFDワーキンググループリーダーの谷本教授も同席。その後、Prof.Alexy Chang (Consultant, CEO)、Dr.Ricardo Batac (Medical Officer)と共に病棟回診。病棟でのケーススタディ。

午後、外来化学療法の視察。(外来化学療法室はゆったりとして広く、チェアが7台、ベッドが3台設置してある。)その後、Medical Social Worker(Ivan Mun Hong Woo)より現在のシンガポールでの介護施設、ホスピス、保険診療の仕組みについて説明を受ける。

3月18日（火）

Prof.Changの回診および外来診療を視察。

Johns Hopkins Singapore (JHS) は、Tan Tock Seng Hospitalの一角に存在している。JHSの外来は1階に、病棟は13階にある。

Breast Tumor Board Meetingに参加。病理医が2人、外科医、放射線科医、oncologistそれぞれ3～4人出席していた。計11人の患者について治療方針を決定し、その方針に従って直ちに治療を開始していた。

General surgery meetingに参加。計13人の消化器癌についてディスカッションし治療方針を決定。

◀JHS の外来。右から、吉野、鈴木、Prof. Chang 、正木。

JHS外来化学療法室。ゆったりとして広く、チェアが7台、ベッドが3台設置してある。(谷本教授、Leong Chin Jong 外来看護師長と共に)▶

3月19日（水）

Urology tumor boardに参加。9例の泌尿器系癌患者について比較的じっくりディスカッションし、治療方針を決定。泌尿器科医、病理医、放射線科医、Oncologistが参加。その後、Prof.Chang、Dr.BatacによるICU回診の視察。前日より呼吸状態が悪化した肺小細胞癌肺炎合併患者の呼吸器管理中。実際の治療は呼吸器内科医が行っている。

午後、Dr.Hsieh(consultant、中国系）の外来視察。中国系患者には中国語で、アラブ系患者には通訳をつけて、それ以外は英語で診察を行っていた。その後、Radio conference（放射線科とoncologistの治療のディスカッション）に参加。

3月20日（木）

Johns Hopkins Baltimoreから研修に来ているレジデント、TracyによりBaltimore症例のcase studyが行われた。原発不明癌につき学習する。その後各Dr.からProf.Changへ病棟患者につき詳細な報告があり、総回診が行われる。回診の後、Ns.を集めてdischarge planningが行われた。

午後、Prof.Chang、Dr.Bharwani(consultant)の外来化学療法を視察。

3月21日（金）

Public Holiday ― シンガポール市内観光

3月22日（土）

外来は休診のため病棟診療のみ視察。土日でも欠かさず病棟回診を行っている。Dr.が休みを取っている場合でも必ず代行医が回診をする。

3月23日（日）

Holiday―ビンタン島へ足を伸ばしました。

3月24日（月）

Prof.Changの回診を視察。
その後、Dr.Lopes(consultant)の外来視察。JHSの外来では1人に30分かけじっくり診察していた。午後はTan Tock Seng Hospitalでの外来診療を視察（JHSはTan Tock Seng Hospitalの一角に存在しており、JHSのスタッフはTan Tock Seng Hospitalの患者もかけもちで診察している)。半日で約25人を見るためドタバタしている。

◀Prof.Changの病棟回診風景。

入院患者の7割がUAEなど中東からきており、病棟にはイスラム教礼拝室が用意してある。▶

3月25日（火）

Tan Tock Seng Hospitalの外来化学療法室の視察（チェアが8台あるが部屋は非常に狭い)。その後、JHSの外来でDr.Bharwani の外来診察を視察。

午後、Prof.Changの回診、外来診療を視察。

3月26日（水）

Dr.Irene Lin(consultant)によるJHS blue letter serviceを視察。blue letter serviceとは、Tan Tock Seng Hospitalの他科からの紹介患者の診察をいう。紹介状が青いためこのように呼ばれている。この日は約20人の入院患者を診察した。13階建ての院内を各階の患者のところまで赴いて診察する。Tan Tock Seng Hospitalの入院患者で癌を患っている場合、必ずJHSのconsultantに紹介がくる。

夜、イタリアンレストランでのパーティに招かれる。(JHS Baltimoreのレジデント、メキシコの医学生の送別会を兼ねていた。)

3月27日（木）

GI cancer update meeting ― Dr.Lopes によるレクチャーが行われた。
「Colon ca. update」のタイトルで、ASCO GIの最新のdataを紹介しながら分かり易く解説。

その後、Tan Tock Seng Hospitalの手術室見学。Lee Sow Fong 手術室看護師長が案内。年間手術16500件、うち全麻8000件、手術室24室、現在19室稼働中。緊急手術20件/日(うち全麻6件)。1 night stay用に73ベッド用意されている。Day surgery は60~65人/日、行われている。

その後、Dr.Bharwaniの外来見学。外来終了後、約1時間を割いてbreast ca. updateをlectureしてくれた。
午後、Radio-Oncologist tumor boardに参加。

◀JHSのスタッフによるカンファレンス。

Tan Tock Seng Hospital ▶の手術風景。手術室は非常にきれいで広く、24室あり現在19室が稼働中。

3月28日（金）

HCC tumor board、Lung tumor boardに参加。

午後、研修についての総括、改善点などの話し合い。

Prof.Chang、コーディネーター(Erin Pung)、オペレーター(Sinan Sanvar)、病棟看護師長(Elizabeth I. Morse)、外来看護師長(Leong Chin Jong)が同席。

深夜　シンガポール発。

1. 研修先において学んだこと

・シンガポールの地理、民族、文化

研修に行って初めて知ったことだが、マレー半島先端の島であるシンガポールの民族構成は、中華系7割、インド系1割（東インド会社に連れて来られた)、マレー系1割、残りの1割を白人などが占める。中国語なまりの英語は、かなり聞き取りにくい。年配の患者で中国語しか

JHSの病棟はTan Tock Seng Hospital の13階にあり、非常に眺めが良い。

話せない患者もいたが、周囲のスタッフに必ずだれか中国語から英語に通訳できる人がいるため意思疎通の問題はなかった。また、地理的に中東からも比較的近く、最先端の抗がん剤治療を受けるため、JHS患者の実に7割がUAEなど中東から来ていた。そもそも2001年の9.11アメリカ同時多発テロ以降はアメリカへの入国が難しくなったこともあり、中東からの患者を受け入れるためにシンガポールにJHSを設立したようである。彼らに対するアラビア語の通訳は入院・外来で計7人いて診療の補助をしていた。

食事は中華系が多く値段もやや日本より安い。また都会のため日本料理を含め様々な店があり、2週間の滞在でも食事には困らなかった。

2. JOHNS HOPKINS SINGAPORE (JHS) について

JHSは、国立タントクセン (Tan Tock Seng) 病院の一角に存在している。タントクセン病院は約1000床の巨大な病院で、JHSの病棟はその最上階 (13階) に、外来は1階に位置している。

JHSは中東の富裕層をターゲットにprivate clinicとして自由診療を行っていた。それと同時にタントクセン病院の化学療法についても、紹介があればレジメンの調整などを行っていた。完全に化学療法に特化した科であり、consultant 5人 (そのうち1人はProf.Chang)、medical officer 6人からなっていた。このうちconsultantはUSAかUKでcertificateされたoncologistであり、誰かが辞めれば本国から補充がある。medical officerはシンガポール雇いで、地元出身者2人、フィリピン人3人、ボルティモア本校1人 (短期滞在) であった。medical officerは自分で化学療法の決定をすることはできず、必ずconsultantのサインが必要。consultant 5人は化学療法に関して (白血病は扱っていない)、それぞれ専門はあるものの総じて様々な癌腫に関してASCOやASCO GIの最新データをもとに、最新の治療を行うエビデンスに基づいた非常に豊富な知識を持っていた。また各診療科とtumor boardを行い、治療方針を決定していた。各癌腫に対するレジメンがきちんと整理されていた。

◀JHSにおける3月のtumor board、conferenceの予定表。

Breast tumor boardの風景。▶病理医、外科医、放射線科医、Oncologist、Research nurseが参加。

3. 今回の研修で改善すべきと思われた点

直接医療ができるわけではなく、ただ見学の日々の2週間であり、日本における日常診療の忙しさに比べれば少し時間を持て余す感じがした。実際の研修も病棟と外来の往復でやや退屈であったが、Chang教授からは最後に、oncologistになるのに王道はなく、1例1例の経験の積み重ねが大切ですとの言葉を頂いた。2週間滞在することで、実際の診療 (診察、会話、カルテなど) からなにかを盗むことを期待されているようである。JHSのシステムやスタッフに慣れるには一定の時間が必要かと思われ、事実2週目には気軽にスタッフに声を掛けられるようになり病棟の資料なども快く分けて頂くことができた。

JHSの研修に対する考え方は、実臨床をみて学ぶものとの基本姿勢を持っており、学生相手でもFD相手でもそれほどカリキュラムを変えたものは用意していないようである。メキシコから来た医学生と数日間一緒に研修を受けたが、英語力のために学生の方がよく理解している場面もあった。ただFD研修として、こちらからレクチャーをもう少し増やすように要望しておいた (日本人はtightな時間割が好きなことを伝えた)。また、各癌腫に対する標準治療が理解できるようなテキストが必要と思われた。(今後も研修に行くのなら何冊か日本語のテキストをJHSのlibraryに置かせてもらった方が良いように思われる。)

今回完全に化学療法に特化したチームの診療を研修して、日本でもいずれは多くのmedical oncologistを養成してJHSと同様の治療を行っていかなければならないのであろうと思われた。しかし今の日本の現状では、外科においても化学療法を施行せざるを得ない状況であり、まずは外科医である自分たち自身が1ランク上のoncologistを目指すべきと考えられた。いずれにしても世界最先端の化学療法が身近に感じられ、大変有意義な研修であった。

がん診療連携拠点病院

広島市立広島市民病院

病院長 大庭 治

広島市立広島市民病院は診療科25科、病床数743床の総合病院であり、広島市の中核病院として「質の高い急性期医療」を市民に提供しています。当院は平成18年8月に地域がん診療連携拠点病院として指定を受けましたが、当院の平成18年8月から同19年7月までの新規がん入院患者数は5,033人であり新規入院患者の28%をがん患者が占めています。全身麻酔下悪性腫瘍手術総数は1,766件で、その他、胃癌に対するESD178件、肝癌に対するRFA144件など多数のがん症例を治療しています。また、化学療法については外来化学療法専用の「通院治療センター(16床)」を設置し、月600件を超える化学療法を実施しています。医療機器も最新の内視鏡システム、MDCT、IVR-CTなどが整備され、また放射線治療部門では平成20年1月に新しくIMRT、定位放射線治療が可能なリニアックが導入されました。

地域医療機関との連携強化、院内を含む地域の医療従事者への研修の実施も拠点病院の大きな責務です。当院では平成18年12月に地域の300を超える医療機関と「K-net」を立ち上げ、院内外から講師を招いて当院・連携医療機関の医師やコ・メディカルを対象に定期的な研修会を開催しています。

臨床研究はEBMに基づくがん医療を推進する上で重要であり、当院の多くのがん関連診療科はJCOG(日本臨床腫瘍研究グループ)やWJOG(西日本がん研究機構)を初めとする多施設共同研究に参加してEvidenceの創出に協力するとともに、国内のみならず海外での学会活動も積極的に行っています。

がん医療専門職の養成は、がん拠点病院を効果的に機能させ高度ながん医療を行っていく上では極めて重要です。このたび、がん診療連携拠点病院に対する指定要件の見直しが公表され、今まで以上にがん診療に携わるスタッフの充実が求められています。「中国・四国がんプロ養成コンソーシアム」を通じ、これらの専門職を養成し、当院のがん診療レベルの更なる向上を目指して行きたいと考えております。

愛媛大学

愛媛大学大学院医学系研究科

研究科長　大西　丘倫

我が国の死因第一位を占めるがんの治療向上に向け、がん専門医の養成とがん診療の地域均てん化をめざして、中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアムが発足したことに伴い、愛媛大学ではがん医療に係わる専門医養成コースとして、「腫瘍内科系専門医養成コース」および「腫瘍外科系専門医養成コース」の２つを開設しています。本年度には、前者4名、後者2名の計6名の大学院生が入学し、将来の地域におけるがん診療のリーダーとしての責務を果たすべく、新規カリキュラムの下、日夜研鑽を積んでいます。

がんに限らず、プロフェッショナルの養成には、卒後の教育だけでなく、学部学生から卒後臨床研修および専門研修まで一貫したエリート教育が必要です。とりわけ、大学入学時の早い時期より、がんなどの重要な疾患に関心を持たせ、自らの学習意欲を掻き立てる教育の環境作りが重要と考えています。愛媛大学医学部では、平成19年度に学内GPとして「愛媛に根ざしたがんプロフェッショナル養成プラン　－卒前卒後一貫教育による臓器横断的がん専門医育成－」が採択され、現在5名の医学生がプログラムに参加しています。本プログラムでは、少数精鋭のインテンシブコースを設け、がんに関する先端医学研究に参加させると共に、がん臨床の第一線を学会参加やがん専門病院実習から体得させ、卒後臨床研修およびその後のがん専門医へのスムースな移行を目的としており、地域に根ざした人材育成をめざしています。

このような様々な新しい取り組みにより、チーム医療としてがん診療が地域に定着し、専門的臨床能力を身につけた医師、コメディカルが各地域で数多く輩出されることによって、地域におけるがん治療の均てん化、標準化が達成されることと思います。この度のがんプロ養成コンソーシアムはその中心的役割を担うことと大いに期待しています。

愛媛大学医学部附属病院

病院長　横山　雅好

我が国は世界に類をみない速さで高齢化が進んでいます。このことは単に、高齢者の健康問題にとどまらず、保険医療、年金保障など社会全体に大きな問題を投げかけています。図らずも昨年から今年にかけて、年金問題と後期高齢者医療制度が政治問題として大きく取り上げられ、国民の関心の高さが改めて認識させられたように思います。高齢者の健康問題を考えるとき避けては通れないのが、がん治療のレベルアップであり、そのための方策の一つが今回の中国・四国がんプロ養成コンソーシアムと思います。愛媛大学医学部附属病院では、今回のプログラムに先立ち腫瘍センターを立ち上げ、質の高いがん治療を提供するとともに、がん治療に携わる専門の医療人の養成に努めてきました。腫瘍センターでは、がんの集学的治療の推進に関する相談・調整・研究、外来化学療法の実施と相談、がん診療の研修支援、がん治療の情報提供、院内がん登録業務、院内がん化学療法レジメン登録、地域医療従事者に対するがん治療に関する情報提供と教育、など幅広い活動を行っています。また、平成１９年１１月から緩和ケアセンターを設置し、がん患者だけでなく後天性免疫不全症候群等の患者の疼痛、呼吸困難、精神症状の緩和ケアを行うとともに、地域医療機関との連携や在宅患者の支援、家族の支援を行っています。附属病院としても、もっとも重要な疾患となっているがんに対する総合的な対策に取り組んでいきたいと考えています。今回のがんプロ養成コンソーシアムが実りあるものになることを期待しています。

6 June		7 July		8 August		9 September		10 October	
1 日		1 火		1 金		1 月		1 水	
2 月		2 水		2 土		2 火		2 木	
3 火		3 木		3 日		3 水		3 金	
4 水		4 金	インテンシブセミナー（香川）	4 月		4 木		4 土	
5 木		5 土		5 火	第１回緩和ワークショップ(岡山)③	5 金		5 日	
6 金	緩和懇話会（香川）	6 日		6 水		6 土		6 月	
7 土	緩和集中セミナー（香川）	7 月	FDシンガポール～18日	7 木		7 日		7 火	
8 日		8 火		8 金		8 月		8 水	
9 月		9 水		9 土		9 火		9 木	
10 火		10 木		10 日		10 水		10 金	
11 水	第1回 Oncology Canference(高知)	11 金		11 月		11 木		11 土	
12 木		12 土	インテンシブ生涯教育コース講演会(岡山)	12 火		12 金		12 日	
13 金		13 日	FDワーキンググループ会議・FD研修報告会(岡山)	13 水		13 土		13 月	
14 土		14 月		14 木		14 日		14 火	
15 日		15 火	第１回緩和ワークショップ(岡山)②	15 金		15 月		15 水	
16 月	FDシンガポール～27日	16 水		16 土		16 火		16 木	
17 火		17 木		17 日		17 水		17 金	
18 水		18 金		18 月		18 木		18 土	
19 木		19 土		19 火		19 金		19 日	
20 金		20 日		20 水		20 土		20 月	
21 土		21 月	FDシンガポール～8月1日	21 木		21 日		21 火	第2回緩和ワークショップ(岡山)①
22 日		22 火		22 金		22 月		22 水	
23 月		23 水		23 土		23 火		23 木	
24 火	第１回緩和ワークショップ(岡山)①	24 木		24 日		24 水		24 金	
25 水		25 金		25 月		25 木		25 土	
26 木		26 土		26 火		26 金		26 日	
27 金	インテンシブ生涯教育コース講演会(川崎)	27 日	看護WGシンポジウム（徳島）	27 水		27 土		27 月	
28 土		28 月		28 木		28 日		28 火	
29 日		29 火		29 金		29 月		29 水	
30 月		30 水		30 土		30 火		30 木	
		31 木		31 日				31 金	

第1回 香川大学がんプロ養成インテンシブセミナー

「がん臨床試験の基盤的知識」

平成20年7月4日(金)　18:00－19:30

香川大学医学部：臨床講義棟1階　講義室

インテンシブ生涯教育コース

「患者の視線に立ったチーム医療を目指して」

平成20年7月12日(土)　13:30－16:00

川崎医科大学：現代医学教育博物館　2階大講堂

医学物理士インテンシブコース

「放射線治療分野における人材育成とがん治療への貢献」

平成20年7月13日(日)　14:40－17:00

岡山大学：保健学研究科　保健学科棟4階　401室

FD研修報告会

・ジョンスホプキンスシンガポール ・エドモントンプログラム ・リー・モフィットがんセンター

平成20年7月13日(日)　14:00－17:30

ホテルグランヴィア岡山 3F　クリスタル

第2回 がん看護専門看護師コースWGシンポジウム

「がん看護専門看護師のエキスパートネスとその活動の実際」

平成20年7月27日(日)　13:00－16:00

徳島東急イン6階（徳島駅前、徳島そごう隣）

中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム　Vol.6

平成20年6月10日　発行

編集兼発行者
中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム事務局
TEL 086－235－7023

印刷所
有限会社 ファーストプラン